

急の事のみをあけくれだ

田園の画家——和高節二とミレー——

八 田 典 子

一、はじめに

日本画家・和高節二を知ったのは五年前の春のことである。

それ以前にも名前だけは教えられたことがあった。しかし、直接に知るきっかけは、その時期、携わっていた文化情報誌のシリーズ記事「訪問記」の取材先として、学芸員のT氏から紹介されたことであった。

T氏に資料を見せていただいた。美術館の所蔵品図録に掲載されている作品と画歴、古い新聞記事、作品を写した写真……。資料は多くはなかったが、九十歳に近い高齢であること、昭和十五年に紀元二六〇〇年奉祝日本画展という大きな展覧会で最高賞を得、全国的注目を浴びたこと、その後も変わらず生まれ育った山里での制作を続けてきたこと、そんな知識を得ることができた。作品はいずれも山村の風物をテーマとした穏やかな作風のもので、抑制のきいた色彩と清々しい描線に心ひかれるものがあつた。

教えられた電話番号を回すと、画家本人が出た。用件を伝えると、

「もうずっとそういうことは断ってきているんですよ」といった返事が戻ってきた。少しくぐもったぼそぼそとした声だった。「ぜひに」と再度お願いする。画家はしばらく黙ってこちらの話に耳を傾けた後、意外なほどあっさり「それでは」と承諾してくれた。

画家の自宅を訪ねた日は、四月初めのとても天気の良い日だった。自宅の裏手の坂道で車を降りると、年配の婦人(註)に寄り添われて細い道をゆっくりと上ってくる小柄な老人の姿が目に入った。老人は近づくこと聞き覚えのある声で言った。

「大変ですのう。わしらがおるけん、いけんのよのう」

初対面の緊張感がほっと和む、飾り気のない温かな言葉だった。

その日、庭に面した画室の一隅で椅子に腰掛け、和高は自らの歩みについてよく語ってくれた。方言での朴訥な語りだった。

画室は広い和室で、一見ごく普通の農家の一室という印象だったが、ひとつ違っていたのは、襖や壁に何層にもなって立て掛けられている作

品群の存在だった。二十一歳の頃描いた新妻の肖像〈妻の像〉、妻子がモデルの〈母子〉、〈猫と話をする老人〉、苔や短い草の生えた石垣を画面いっぱい描いた一見抽象画とも見える作品……。対談の後、和高がゆっくりとした足取りで画室を巡り、作品を紹介してくれたことを今懐かしく思い出す。現在はその多くが広島県立美術館の所蔵となっている作品群である。

対談を終え、帰路についた私の胸には、その日の青空にも似た清々しい感動が広がっていた。社会に出て何年かたち、社会や人々の有り様に失望を感じることも少なくなかった時期でもあり、人生と芸術に対する和高の真摯な言葉には胸打たれることが多かった。さわやかな野の風に顔を吹かれた思いがした。

そして同時にその感動の中に、一つの疑問が生まれていることに私は気づいた。和高の創作に対する思い、その熱さ、ひたむきさには一種不思議な感じさえあった。芸術こそが和高の生涯を貫く一本の強靱な支柱だった。「なぜこれほどまでに」、私はそんな思いを感じずにはいられなかった。それはおそらく一生、人間と芸術の関わりを見つめ続けていくであろう私にとって、もっとも根源的で重要な問いかけでもあった。

対談の中で和高は画家を志したきっかけを次のように語っている。^(注3)

「わしゃあ、若い折から虚弱の質での、それは現在も続いております。で、小学校卒業する頃にの、何になろうかと思うところが、ま、一番自分が好きなことというのが、図画が成績がよかったら思うのよの、そうしたらやっぱり絵の方行つたがええかの思うて。芸術よの。芸術なら

の、自分が自由になるだろと思うたん。それからその頃、ロマン・ロランの書いた『ベートルヴェンとミレエ』ゆう本を、わし、こうての、それえ教科書にした訳よ。その本をの、風呂をたくにも山へ行くにも、懐へ入れての、見て……。絵描きの歩く道よの、ミレエの技術を習うんじやなしに、絵描きとしての生き方ゆうのを、教わった訳なんで。それえ感激した訳よの、うん。やっぱりそれが本当のような、わしや、気持ちになつての。それがわしの、今日に至るまで一生を支配しましたのう、うん」

この言葉の中で特に印象深く思えたのは、芸術なら自分が自由になるだろうと思つたというくだり、そしてロマン・ロランの一書『ベートルヴェンとミレエ』との出会いである。

その日私は写真撮影の必要もあつて、この貴重な書物を借り受けた。色褪せたページを開くと和高の手になる書き込みが散見された。「風呂をたくにも山へ行くにも、懐へ入れて」、何度となく開いて読んだであろう若き日の和高の姿が彷彿とした。その情景には、人を捉えて離さない芸術というものの不思議さが大変純粋な形で現れているように思えた。ミレーとの出会いが一生を支配したとまで和高は語っている。和高節二とミレー。一見対照的な二人と言うべきかもしれない。国も時代も、あるいは知名度も、そして同じ絵画とは言え技法も作風も。しかしその違いを超えて、この二作家の世界には確かな共通の流れが認められるのだ。

本論では、和高とミレーのもっとも分かりやすい共通項、「田園」と

いう環境に注目しながら、二作家の作品世界を訪ね、芸術の本質的な交流の奥深さに触れてみたい。

二、ミレーと日本

昨年八月から十二月にかけて、東京、京都、甲府で大規模なミレー展が開催された。「『四季』アース色のやさしさ」という副題が付けられ、主催者に名を連ねるマスコミの意向もあったのか、エコロジイという言葉が注目される現代において、〈四季〉という作品を中心に、ミレーの作品に見られる自然観、自然と人間との関わりを見つめ直そうという視点の加えられたものであった。

十月半ばに京都展を鑑賞した。ミレーの作品をこのようにまとまった形で見るのは初めてでもあり、興味深いひとときを過ごすことができた。今までも内外の美術館で何点か、ミレーの作品を目にする機会はあったが、ミレーの名はあまりに有名であり、既存のイメージが先行してしまつたためか、あまり丁寧に見ることはなかった気がする。和高との出会いによって私はミレーを見直す形となったのだが、今回、初期から晩年まで、質量ともに充実した作品を前にして、一作家ジャン・フランソワ・ミレーとようやく正面から向きあえた気持ちであった。特に、洗いけれども澄んだ色彩、時に荒々しいほどの力強さがほとぼしる描写などに新鮮な印象を受け、〈春〉や〈鳥の巢狩り人たち〉といった何かしら妖気漂う作品にはミレーに対する認識を新たにすることもあった。

そして同時に、会場に満ちた熱気―入場待ちで長蛇の列ができるほどの盛況ぶりにも強い印象を受けたのである。年配の女性グループが、収獲をテーマにした絵を前にして、自分たちも昔同じような道具で同じような作業をしていた、と、声を弾ませて話しているのを耳にしたが、会場の熱気にはそういう懐かしさ、親近感が漂い、ミレーはやはり日本人に深く親しまれている画家なのだという思いを強くした。

和高との関わりを考える前に、その基盤である日本との関わりを見ておきたいと思うが、まず最初に、ミレーの足跡をおおまかにたどつて見よう。^(注4)

ジャン・フランソワ・ミレーは一八一四年、フランスはノルマンディ地方の小村グリュシーに生まれた。八人兄弟の長男、姉に続く第二子。両親の他に祖母や大おじ、大おばも一緒という大家族であった。家は信望のある農家で、信仰厚く、教養豊かな家風の中で、読書の習慣や古典の素養を身に付けながら育つ。特に敬虔なカトリック信者であった祖母の影響を強く受けたといふ。^(注5)

絵は子どもの頃から好きであったが、一八三三年、十九歳の時、家族の理解に支えられ、絵を学ぶため十七キロ東のシェルブルに赴いた。そして三七年にはシェルブル市の奨学金を得てパリへ行く。ルーブル美術館を熱心に鑑賞し、特にミケランジェロに感動している。また、ドラロッシュのアトリエに入っている^(注6)。四〇年、二十六歳でサロンに肖像画が初入選。初期は肖像画、続いて「華やかな手法」(裸体画、牧歌的神話画)の時代。しかし、実生活上は餓死寸前の貧困

の中で最初の妻ポーリーヌを亡くすなど、大変厳しい時代であった。

四五年、カトリーヌ・ルメルと一緒になる（ミレー家の反対があり、入籍は五三年、挙式は七五年。九人の子どもに恵まれる）。四七年、後にミレーの伝記を書くサンスイエヤ、ドーミエ、テオドル・ルソーらを知る。四八年三十四歳、〈箕（み）をふるう人〉好評（無審査のサロン）。農民の主題に本格的に取り組み始める。四九年コレラが発生。パリの東南六十キロメートルの位置にあるフォンテーヌブローの森に隣接するバルビゾン村へ行き、以後定住する。

五〇年〈種をまく人〉制作。五三年アメリカ人が来訪して作品購入。生活安定し始める。五七年〈落穂拾い〉、五九年〈晩鐘〉完成。晩年は次第に風景が主要なテーマになってくる。六七年、五十三歳の時、万国博美術展に一室を与えられて回顧展開催、確固とした地位を築く。また同年、親友ルソーの死を看取る。六八年レジョン・ド・ヌール五等勲章を受ける（日本ではこの年、明治維新）。七〇年にはサロンの審査員を務める。七四年国家よりパンテオンの壁画制作の依頼を受けるが健康上の理由でデッサンにとどまる（この年、後に第一回印象派展と呼ばれる「画家、彫刻家、版画家の無名作家協会展」が開催され、印象派の名の起りといわれるモネの〈印象・日の出〉が出品されている）。七五年一月三日結婚式を挙げるが、二十日死去、享年六十歳。ちなみにミレーと並び称されることの多いコロもこの年亡くなっている（コロは一七九六年生まれ。バルビゾンに住んだことはない）。

さてここからは日本に視点を移したい。ミレーは日本でいつどのよう

に紹介され、受け入れられてきたのだろうか。^(注7)

ミレーが亡くなった翌年、日本では明治九年、工部美術学校の画学科の教授としてイタリアからフォンタネージが来日するが、この時彼が教材として携えて来たのがミレーの作品が日本にもたらされた最初である。ただしそれは原画ではなく複製画か、またはミレーの死去直後にその作品が多く版画にされたので、そういった作品を教材用としてそろえてきたと考えられている（教材資料中十九点の鉛筆画手本が現在東京国立博物館に所蔵され、その中に数点ミレーの作品あり）。高橋由一の手になるミレー作品の模写、〈たきぎを集める人々〉（由一画題名〈農夫〉）、〈草を焼く女〉の二点が今日に伝えられているが（東京芸術大学蔵）、そのものになったものと推察されている。その後、明治二十一年には黒田清輝がバルビゾンを訪問。ミレーの息子と、ミレーについて語っている。

ミレーの真作が日本で初めて公開されたのは、明治二十三年。第二回明治美術会展覧会に林忠正（明治十一年パリ万国博覧会の通訳として渡仏、そのままパリに滞在し、美術商を営む）が参考作品として、ドービニーやルソーなどの作品とともに出品したものである（題名は〈帰群〉、〈晩秋〉。油彩画か素描かといった種類は不明）。二十六年にはアメリカで万国博覧会が開催され、陳列された世界各地の美術品を日本画家の久保田米徳が模写し、これを木版刷りにした『関龍世界博覧会美術品画譜』が同年出版されているが、その第一集（第四集まで出版されたりし）に解説つきで、ミレーの〈罍による人〉（昨年の展覧会出品〈罍を

持つ男）、〈落穂拾いー夏ー〉が載っている。

さて、その五年後の一八九八年、明治三十一年に和高節二が誕生するのだが、この明治の三十年代、一九〇〇年前後は世界的にミレーの人氣が高まっており、日本においてもこの頃からミレーを取り上げた出版物が大変多くなっていく。三十四年に白馬会絵画研究所編纂の「美術講話」（その中の黒田清輝執筆「第十九世紀仏国画界の思潮」中）。三十五年から三十六年にかけて「美術新報」にアメリカで出された伝記の翻訳「ジャン・フランソア・ミレー」（第三回より「画傑ミレー伝」、五回頃から「画傑ミレー伝」、九回連載。その第二回には、後年岩波書店の商標になったものの原画と思われる「種をまく人」の図版が掲載されている（原典にはなし）。また三十六年には、『ミレー画譜』、『ミレー名画全集』の二つの画集刊行。四十五年には黒田清輝の「二十餘年前のバルビゾン村」が「美術新報」に掲載される。二十年以上も前の訪問をこの時期に文章にしたことは、このごろにはミレーが広く受け入れられていたことの証と言える。また、三十四年には浅井忠がバルビゾンを訪ねている。

和高が感銘を受けたロマン・ロランのミレー伝（一九〇二年ロンドンで刊行、翌年ニューヨークでも）は、日本で翻訳が出されたのは一九一四年大正三年が最初である。以後大正年間に三人の訳者により五種類刊行されたらしい。和高が入手したものは加藤一夫訳、大正四年洛陽堂刊である。

和高とミレーの出会い、ミレーの人氣が高かった時代の流れの中で

の出来事であったことが分かる。おそらくその頃、ミレーに対する思慕の念は、芸術家志望の青年たちの間にかなり広く認められるものであっただろう。

「白樺」の表紙にミレーの素描が掲載されたり、伝記が連載されるなど、大正時代を通し昭和初期までミレー関係の出版物は相次いでいる。単行本が多いのが大正期の特徴である。しかし関心の度合いは明治末年ほどではなかった。「白樺」でも全体で見ればミレーに関する記事の分量は少なく、ミレーないしバルビゾン派の紹介に決して積極的ではなかった。白樺派が開催した展覧会の資料にも、セザンヌ、ルノワール、ドガ、ゴッホなどの名はあるがバルビゾン派はない。つまり、ミレーの次の時代の作家たちの紹介に重点が置かれていたのである。しかしこのことは、当時既にミレーの名が、改めて紹介する必要があるほど広く一般に浸透していたことを示しているとも思われる。いささか感傷的な農民画を描く画家として一般の人氣が上がるとともに、反比例するように美術雑誌からはミレーの記事が減っていったのである。

昭和三年、小学生全集『西洋偉人伝』（文藝春秋社）に「農民画家ミレー」掲載される。「偉人伝」という言葉に明らかのように、特に日本におけるミレーの紹介はその生涯や精神性を重視する傾向が強い。いまだにミレーと言えば、何かしら道徳具を感じる向きが多いのではないだろうか。四年、八年とアトリエ社から画集刊行される。また、同じく八年には、岩波書店が商標を「種をまく人」に定めている。これは創業者の岩波茂雄の意志によるが、この決定には、岩波が個人的にミレーを好

きであったこととあわせ、当時一般にミレーがよく知られていたことがその背景として考えられよう。『岩波茂雄傳』（安倍能成著。昭和三十二年、岩波書店刊）には、この決定についての問いに答えた岩波の次のような言葉が紹介されている。「私は元来百姓であつて、労働は神聖なりといふ感じを豊富に持つており、従つて晴耕雨読の田園生活がすぎであるといふ関係もあり、詩聖ウォーズワースの『低く暮し、高く思ふ』を店の精神としたためです。なほ文化の種をまくといふやうなことに思ひ及んでくれる人があれば一層ありがたい」（原文旧漢字）。

昭和に入ると、先に述べた一般への浸透が進むと同時に美術雑誌からは消えていくという傾向が一層強まつていく。三年から九年まで開かれた松方幸次郎コレクションによる「欧州絵画展覧会」ではミレーの作品が何度も出品されている（素描が多いらしい）。三年には東京府美術館で「大原孫三郎氏蒐集 泰西美術展覧会」も開かれ、ヘグレヴィユの断崖展覧。そして五年には日本初の公共西洋美術館である大原美術館が開館し、この作品も常設されるようになる。西洋美術が一般に身近になつていった、その流れの中でミレーもまた一層親しまれていったことが思われる。

しかしその後、明治末から大正にかけてピークを迎えたミレー・ブームともいえる関心の高まりはおさまつていく。アメリカや西欧でも一九二〇年以後ミレーの評価は急速に衰えており、日本でも同様の流れがあつたといえる。印象派やキュビズムなど、新しい世代の運動や様式の人気が上昇して、バルビゾン派に取つて代つた形である。戦後になるとミ

レーは美術全集から外されることも時々あつた。

その後、ミレーの再評価は、一九五六年、イギリスのアート・カウンシルが彼の素描展を企画した頃に始まる。六二年にはアメリカで巡回企画展「バルビゾン再訪」開催。その二年後、シェルブルとパリで優れた回顧展が開かれ、その後展覧会が相次いだ。日本では一九七〇年、ミレーの作品五十五点を含むバルビゾン派の大規模な展覧会が開かれ、東京では三十万人、ほかの三都市でも各六万人以上が入場している。七五、七六年には、パリ、ロンドンで初の大規模な国際的ミレー回顧展開催。そして七八年、昭和五十三年になると、〈種をまく人〉をはじめとするミレーの諸作を集めて大きな関心と呼んだ山梨県立美術館が開館している。あわせて日本ではここ十数年、ミレーとバルビゾン派に関する展覧会が相次いで開かれており、一時のブームは去つたにせよ、日本人の心の中にミレー人気は温存されていたものと思われる。

三、和高節二の歩み

さて一方の和高節二は、前述したように明治三十一年（一八九八）、広島市からJR芸備線を一時間半ばかり行つた所にある高田郡向原町の長田という集落に生まれている。^(註)家は農家だが、八歳の時、父親がカナダに出稼ぎに赴く。六年後に帰国するが、節二を大変可愛がっていたという父親が海外経験者であつたことは、広い世界の風に触れるよい機会であつたと思われる。そして、いつしか一番好きで、成績も良かった絵

を志すようになる。ロマン・ロランの『ペートル・ヴェンとミレエ』に出会い、決意を固めたのは先に述べたとおりである。初めは洋画を勉強。自画像やパステルの風景画などを雑誌の懸賞に応募して入賞することもあったという。十八歳の頃絵が習えるということで、表具所に通うが一年で止める（しかしこのとき習い覚えたものであろうか、和highは自作の表装を手がけることがあった）。初めの頃はレンブラントのような肖像画家になりたい、という気持ちもあったようだ。自学自習しているうちに、日本画志望となる。

大正七年（一九一八）、母、姉、妹が次々伝染病（チフス）にかかり亡くなる（まず姉が嫁ぎ先で発病、看病に赴いた母、妹が感染。自身も感染し、しばらく療養。また、妹ミツノの名をとって、「光野」と号した時期もある）。翌年、絵の勉強を志し上京、日本美術学院の美術学校日本画科及び洋画科に入学、主にデッサンを学んでいる。（日本美術学院は大正二年、小説家田中掬汀が設立。掬汀は美術批評も手がけ、この学院創設以来画家育成に尽力し、独学者が望む各種の講義録や美術全般の解説書、辞典、画集も発行した。さらに会員を募集し、その作品を添削して返送するという、今でいう通信教育のシステムを開始しており、和highはこの会員となって講義録などを入手していた。東京方面の情報キャッチは小学校時代から手慣れたもので、早かったという。大正四年、掬汀は日本画の美術専門月刊雑誌「中央美術」を発売し、日本美術学院と一体化して懸賞作品を募集し、誌上で紹介するということも始めている。和highも応募し何度か掲載されている。また川端画学校にも通う。

しかし、夜、「帝大の青年仏教会ゆうような所」へ行って話を聞いているうちに、故郷に一人残してきた父親のことが気にかかり、悩んだ末帰郷。そして結婚するが、画家志望に変わりはなく、翌九年より月に一、二度、「東京通い」を始める。これは、第二次大戦末期、交通事情が悪化するまで続いている。同九年第一回中央美術展（日本美術学院が設立）に「繫がれたる牛」が入選。審査員の顔触れが気に入り出品したという。この作品が平福百穂の目に留まる。以後中央美術展への出品、入選が相次ぐ。十年、本格的美術研究開始。東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館などを熱心に巡る。また、知人の紹介で国画創作協会の土田麦僊を訪ね、京都在任を勧められるが、特定の団体に属することを嫌い、二度と麦僊を訪ねることはなかった。

十一年（一九二二年）向原町内の芸備銀行（向原町坂、現広島銀行）の横に家を借りドガ堂と名付け研究所とする。同好の土が集まる。ここで県美展への出品作を制作したが、この頃から昭和五十八年、八十五歳まで、県美展へはできるかぎり連続して出品している（その後も出品の意欲はあった。私が最初に訪問した時も、「年に一回、県美の作品だけは、描くんですよ。審査員になれ、何になれいってまあ、いろんなことがありますわの。わしゃ、それを全部ことわって、若い人に頼んできとるもんですけん、せめて作品だけのはの、皆さんに見てもらわんなあ、思うて。今年も今、取り付いとるんですよ。今、老化現象での、思うことが描けず言えずするけん、そういう中でもできる作品を作ろう思うての。自画像を描いて出そう思いよるんよ」と語り、スケッチはできて

いる、日本画で自画像は少ないし、とも言い足していた)。

川端画学校は帰郷に際し、それ切りとなったが、そこで知り会った吉川靈華の門人に連れられて、十四年吉川のもとへ行く。そして今度はそこで、時の大家の青年時代を皆養ったという「表具師の親分」に勧められ、昭和三年(一九二八)平福百穂の門に入る。しかし和高の思いは、絵を教えてもらう、見てもらうということではなく、立派な先生の生活や人格の一端に触れさせてもらえればそれでいいというものだったらしい。そして、向原の自宅で描いた「無茶苦茶の絵」を、「多くの審査員が見られるんじゃない、よかつたら採ってくださいろうし、悪かつたら落としてくださいるけん、それが一番ええ」と思い、日展など中央の展覧会へ出品し続ける。「本だけはもう、あらゆるもの」を買っての独学であった。また家業の農作業と制作のバランスを取ることに苦心し、三十歳頃ようやく一年間のペースをつかんだという。

昭和四年(一九二九)三十一歳の時、第十回帝展に初入選。昭和三十八年に健康上の理由もあって日展など公募展への出品を断念するが、それまでに帝展、文展、日展、あわせて八回入選している(健康について言えば、和高自身、絵を志すきっかけの一つにも挙げているが、子供の頃からあまり丈夫ではなく、生涯を通じ、胃潰瘍、動脈硬化などで何カ月、何年と闘病生活を送ることも度々だった)。九年(一九三四)ドガ堂同人の世話で、向原尋常高等小学校で個展。十三年に第一回現代美術展に入賞、翌年も同展入賞、同じく十四年院展入選。そして十五年に、紀元二六〇〇年奉祝日本画展で最高賞の文部大臣賞を受賞する(その下

に一席から五席あり、さらに佳作があり、佳作に東山魁夷の名も見える)。

この時は、山里に住む独学の無名画家の受賞ということもあって大変な注目を浴び、全国から画商が詰めかけた。和高は入院してしまふほど非常に困惑し、色紙を一枚ずつつけて画商が置いていった金品をすべて返し、「はあ、もう一べん、こがあな目におうちゃいけんゆうことを思うた」という。

昭和三十六年丑年を祝し、天満屋広島店で個展開催。牛は和高にとって重要なテーマであり、多作している。先の奉祝日本画展の受賞作も「牡牛(こつとい)」であった。

広島市中区のスズカワ画廊でも何度か個展開催。六十一年には広島県立美術館で主要作品十四点が特別陳列される。同年、向原町名誉町民に推され、向原町の駅ビル完成記念として向原町中央公民館で町内所蔵作品展も開催された。六十四年(一九八九)一月にはやはり県立美術館で「和高節——野に生きる——」展開催、あわせて画集も刊行されている。

平成二年(一九九〇)の秋、十月十日、和高は九十二歳でこの世を去った。自宅近くの寺であった葬儀では、県美展に出したいと語っていた作品のためのものではあるか、写真ではなくデッサンの自画像が祭壇に飾られていたのが心に残った。

明けて三年一月には、スズカワ画廊で遺作展が開催されている。

四、芸術観・自然観

和高の作品は穏やかで明るい。陰影があまりなく平面的とも言える。人を不安にさせるような無気味さや衝撃といったものとは縁遠く、制作の背景として、穏やかな風土の中での落ち着いた生活がうかがえる。

テーマは、家族をはじめとする村の人々、牛、猫、柿など、身近な山村の風物である。餅や魚などを描いた小品にも味わい深い作品が多い。中でも牛は「牛の和高」と言われるほど主要なテーマであったが、多作の理由を尋ねた時の和高の答えは次のとおりであった。

「わしは農家に生まれた農民ですけんわ。ここにおって、牛もこおとたんじゃ。農村の偉大さ、健康さ、力強さというものを表現するのが、農村に住む絵描きの仕事ですが。牛は農家の宝ですけの、牛の力強さ、農民の力強さゆうものが、作品の中に出てくれりゃあいいと思うて。自分じゃあ。自分を描くゆうことですけいの。全部がわし、作品は画像だと思っんですよ。こりゃあまあ、誰もがおっしゃることですがの「生涯を通して和高の制作を力強く支えてきたこの「農村に住む絵描き」としての使命感にも、ミレーへの深い敬慕がうかがえよう。

ミレーをはじめ、和高が語る画家は西洋に多い。レンブラント、セザンヌ、ゴッホ、セガントーニなどである。「西洋の大家は、とにかく自分の、日常の生活そのもの、描いとりなざるよのわ。わしが西洋の作家にひかれるのはそれですよ。(中略)自分の台所からの、靴の破れからの。それが皆、世界の名画になつとるでしようがの」

そして、自身を流派にはまっていけない我がまま者と呼び、「ようても悪うても、たった一人の和高節二の絵を描いて行こう思うての、今日までやつとるの」と自らの歩みを振り返り、一休の書『魚夫生涯竹一竿』を、自分の生活を描いてもらっているような気がして好きだと、年中床の間に掛けていた和高である。

和高の次男の伸二氏は、長く学芸員の職にあった美術の専門家であるが、彼によると、和高節二に四本柱があった。それは、①日本美の伝統を嗣ぐこと、②清潔美であること、③健康美であること、④高尚美であること、というが、作品とともに和高の言動からもなるほどとうなずけるものである。

生涯をかけて追及してきたことは何かという質問に対しては、和高は次のように答えた。

「(しばし沈思)作品がの、清潔でなけりゃならんと思うの。わしが今の、自分で許される思うことは、邪念なしに自分だけを生かして来た、それはその、ただ清潔であったということ、生き方が、歩いて来たのが。それがわしの作品だと思っの。(中略)半切一つにしても、色紙一枚にしても、汚れずにきれいであったゆうことが、わしの一つの誇り。目的もなんもなしに、今日まで歩いて来たんですが。ことごとこと歩いて来たんですが(沈思)」

自己を律し、より高い芸術創造を目指す厳しい姿勢とともに、生きとし生けるものへのあたたかな共感もまた、和高のものであった。猫と向き合っって楽しそうに笑っている農夫を描いた作品『猫と話をする老人』

について、「猫の声が聞こえ、鳥の声が聞こえ、そういう生きとるもの、自然の声が聞こえなかつたら、いけんと思うのよ。そういう声が聞こえて初めて、人生があると思うの——」と語る和高。そして自らの生について、「ここで生まれここで育って、ここで一生を終らせてもらうんでがんす。こんな幸せはありませんよ。（中略）今日、今日、今日。一生いっぱい生きて行こう思うての」と、淡々と言葉を継いだ。

すがすがしい作品とともに、一人の人間の歩みとしても、心ひかれるところの多い作家である。

さて、京都でミレー展を見た後、山梨県立美術館へ足を伸ばし、ミレー担当のT学芸員と興味深い話を交すことができた。以下、要旨を挙げてみる。

まずミレーの絵について。ミレーの絵は、どうしても道徳的に見られがちな性質がある。人間と自然はどうつきあうべきか。人間はいかに生きるべきか、そんな問いを投げかけてくれる。特に労働について。パブルの崩壊、過労死といった問題を抱えた現代にあつてはなおさら、まじめに黙々と働く農民の姿は労働の意味について考えさせてくれるものと言えよう。ミレーの絵は見る人それぞれの人生観に語りかける絵ではないだろうか。

それから自然観ということに話が進んだ。一般に東洋と西洋では自然観が違うと言われる。東洋では自然は人と親しく、ともに調和して存在するもの、西洋では開拓の対象といったとらえ方だが、ミレーの場合は

両方認められる。西洋的なものとしては、土と格闘する農民の姿、毎日繰り返される自然との戦いに疲れ果てた人間の姿を生き生きと描いた作品群がある（実際会場で、画面から土や汗の臭いがしてくるのではないかと気が持ちがするほど荒々しい迫力に満ちた作品に接した。ミケランジェロが好きだったということがなるほどと思える力強さもあり、一筋縄ではいかない頑固さも感じられた）。

そして一方に、人と調和してある自然がある。特に〈春〉という作品。これは親友ルソーへの追悼の思いが込められているといわれる不思議な魅力のあるもので、私も会場で長く足を止めた作品であるが、あの絵には大変東洋的な自然観がうかがえる。雨が止んで、雲間から一瞬光が差し込んで、虹が出た。そのつかの間の情景が描かれているのだが、そこにあるのはとても東洋的、さらにいえば日本の感性ではないか、どうしてミレーはそういう感性を身に付けたのだろうか、とT氏は言う。まるで俳句の世界のようだ、と私も応じた。

自然を見つめ自然豊かな環境で暮らすことによって、その感性は、自然にミレーのものになったのではないか。戦いから調和へ、ミレーの自然に対する思いは確かに変化している。彼の絵の中で、人間はだんだん小さくなり、自然が大きなスペースを占めるようになっていく。ただ本当に自然のみということはない、人を寄せ付けないような自然ではなく、画面のどこかに人の姿や痕跡、道や家といったものがある、人のおいのする自然である。自然豊かな環境の中で年を経ることにあって、人の暮らしを包み込むようにしてある自然の偉大さを深く認識し、その自然

と調和して生きることの大切さをミレーは体得していったのであろう。

さて、和高的画集をT氏に見てもらったところ、ミレーとの共通点と
いうことで、次のような話を伺った。

家族など身近な人々を描いた作品が多いこと。中でも母と子の姿。母
が子どもの世話をするという題材はミレーも好んでいた。

働く絵では登場人物は女性が多い（ミレーでは、男性は休んでいる姿
を描かれることも多い）。

農民一般、普遍的な農民の姿を描こうとしたので、顔の表情ははつき
りしない。無表情のことが多い。

全体に和高的作品は、ミレーの五十年代の作品（人物画が中心）に近
い。

さて、ミレーの場合は、だんだん自然が主要なテーマとなり、風景が
画面の多くを占めるようになったが、和高的場合は山河を描いた風景画
というものはほとんどない。和高的自宅は少し高台にあって見晴らしも
よく、本当に自然の恵み豊かな所であっただけに、このことは前から少
し不思議であった。折をみて家族の方に尋ねたところ、先に名を挙げた
伸二氏から手紙をいただいた。ミレーとの関わりについても触れてある
ので、ここでその一部を紹介したい。

「同じ田舎に身を置き、ミレーに学んだことはたしかです。然し御承知
の通り、日本画には日本画の伝統があり、日本画的世界観では、自然の

中に、人間を共に描くという、ヨーロッパ風のものは、絵巻物、あるいは水墨画を除いてはありません。自然と人物が共にあり共に生きるという写真の道を取りません。人物画家は人物画家というジャンルを守ります。鏑木清方、上村松園、中村貞以、等々、人物画家は、人物画家で、人物を扱います。

亡父の出发点は、農民を描く人物画家で、後にレンブラントを尊敬したのもレンブラントの人物画に惹かれたからです。

従って、風景画の小品は描いたものが数点残っていますが、また下手ではありませんでしたが、大作を描くつもりはありませんでした。

しかし、ミレーの大自然と共にある人間の姿にはあこがれていたと思います。そこで亡父の場合、ミレーのあの自然を観念化して、日本画の伝統により、人物の中に象徴化していくことにとめていました。自然は描かれていなくても、自然が人間の中に昇華されている、これが農民なのだというわけです。ですから亡父の場合、リアルに農民を描くのではなく田舎という自然によってつちかわれ浄化され、健康化され、崇高化され、美化された人が問題であった、しかも人格主義的理想主義の人でしたから、すべての人物から悩みをおい出し、田舎が永遠にもつ健康なるものを人物に描き出す、そういうことを常に口にし、又描くべく努力していたように思います。

しかしミレーの自然にくらべて、長田の谷間は、大自然の形態をとっていいないことを十分に承知していました。何の変哲もない自然である。ことを十分知りつくしていました。そこで、夜をこよなく愛しました。雪

の日を雨の日を愛しました。とくに夜、あらゆるものは闇に埋没し、大自然に帰一することができる。夜だけは、せまい谷間が、闇において大自然となる、夜が明ける、夜が谷間をつくり出す、だから狭い谷間も、そこに咲く草花も、野菜も、何もかも、夜という大自然が産んでくれたものです。夜の創造、そこにミレーの現実にみた大自然をみたのです。亡父は、大自然の創造をそういう風に自分の創造におきかえることに努力した人です」

夜を愛し、雪の日、雨の日を愛したというくだりに、また、和highに對する新たな認識を得た思いがし、和highの絵は、直接自然そのものを描いていなくても、自然に抱かれ、自然と調和して生きる人々の姿を描くことよって、人間の暮らしの周囲にそれを包み込む形で広がっている大自然の存在を示していることが改めて思われる。

五、「田園」の魅力

田園に生き、描き続けた和high自身の田園への思いをつづった文章をここで紹介しよう。

レンブラントのような絵かきになりたいと少年のころは夢をみた。東京は自分のすめる世界でなかった。すなをに山にもどった。遠くの方から東京をながめた。それもいけなかった。もう一度目をとちて青

い空をみた。はじめてほんとうの自分がみえた。野原にとっかかりこしをすゑた。ここに生まれここでそだちここで一生しづかにわがままにくらさせてもらゑる幸にきがついた。作家としてこんな幸はないと思つた。人間のよろこびが湧いた。豊かさが無限にひろがった。生きてる事の生きていた事の生きてゆける事のすばらしさ。よろこびは大きい。幸も大きい。どうしたらいい絵がかかるか。かけるだろうか。ゑの事のみをあけくれた。山も乃はらも人間もみんなけんこうだ。素朴だ。野の花にも小鳥たちにも天国だ。空もすみに澄んでいる。きれいだ。ここが浄土だ。よろこびも幸もここにある。

ミレーと和highにとっては、田園は、初めからごく自然に自分を包み込み、自分の中に浸透していたものと言えよう。都会も知り、一時的にしても比べる思いもあつただろうし、それによつてそれまで気付かなかつた田園の魅力に気付くということもあつただろうが、何かに對抗して選んだというより、ごく自然に帰つて行くべき所、自分が自分らしく生きられる環境だつた。そして、その中で実際に、長く暮らすことによつて得られる、主に自然と人間についての目覚め、発見を重ね、それを制作と人生に活かしていったのだ。

少し前のことになるが、新聞紙上で都道府県の豊かさを比較し、いわゆる地方の方に軍配が上がつていた。現代は、環境問題が重視され、「田園」の魅力が見直されている時代なのであるうか。

自然と人がほどよく調和している所、人も自然の一部として、ほかの

多くの生きる仲間とともに、みずみずしく生きられる所―「田園」という言葉が与えるこのようなイメージは広く共通したものと思える。都会しか知らない人々でも、田園といえれば何かほっとする懐かしいような思いを抱くであろう。田園はふるさとや幼年時代のイメージとも重なる。人それぞれに心の中に、自分の「田園」があるに違いない。

広島市出身の映画監督、新藤兼人氏の「雀になりたい」と題したエッセイ^(注9)に、次のような箇所がある。モスクワで聞いた雀の声に注目し、モスクワと広島では雀の鳴き声もアクセントが違うのではないかと思っただけから書き起こし、雀が違えば人間が違うのも当然、自分が東京に出た最初の頃は広島弁を気にして、一言しゃべるのにも注意したものが、今はそんなコンプレックスからは解放されていると続けて、

「年をとって厚かましくなったせいとか、いやいや年に関係はない。いまは、何処で生まれたか、ということが大事な時なのである。情報文化の発達で、なにもかも一色に塗り潰される時代であり、また塗り潰されたがる時代でもあるのだ。生きがいを支えてくれるものは己がアイデンティティーだけである。」

わたしが広島山の山奥で小学校へ行っていたとき、雨のあくる日、道がまばゆいほどに白くなった。花崗岩土壌だから、雨のあとは白い砂が浮きあがってくる。

この白い砂のうえに、わたしという動物は生まれ育った。その風土は、わたしの性格をつくり、コトバをつくり、考え方をつくったにちがいない。東北の火山灰地のうえに生まれたものは、黒い土のうえで性格をつ

くったことであろう。それが人間という動物のそれぞれの個性である」

芸術に心寄せる人々、芸術創作を志す人々にとっては、それぞれの「田園」を大切にすること、そこで育まれた「個性」を大切にすることは、大変に重要なことであろう。和高とミレーの場合は、文字通りの「田園」がその人生の舞台であったが、そこに積極的な意味を感じ、それぞれの個性を頑固なまでに大切にしたい、だからこそ人の心を打つ作品が生まれたのだと言える。

「田園」という言葉のイメージはなかなか美しいが、もちろんそこはパラダイスではない。人が生きる上での生活上の様々な苦しさは当然あり、過去の時代においては特に、都市生活とは異質の労働の激しさもあつたであろう。和高も農作業と制作の両立に随分苦労をしたようだ。和高もミレーもそのような労苦を熟知していたが（ミレーは職業画家ではあつたが）、しかし同時にまた、それらを包み込み、浄化する自然の偉大さ、美しさが「田園」にこそ力強く息づいていることをも十二分に知り得ていた。特に和高においては芸術の世界を、実生活を豊かな土壌としつつも、その上に浄化され昇華された世界として位置付けていたことが顕著である。それだけに出来上がった作品は、身近な生活を主題としつつも生活臭のあまり感じられないものであり、何かしら物足りない思いを抱く向きもあるかも知れない。しかし、浄化された美しさこそが和高芸術の真髓であり、そこに込められた和高の思いは明確であり、頑固でさえあつた。和高芸術は、田園という土壌の上に、和高節二という

一人の人間のひたむきな意志が次々と生み育て、開かせた花々であると言える。

六、おわりに

和高を知ったことで、私は多くのことを学んだように思う。中でも、伸二氏の手紙にも「人格主義的理想主義」という表現があったが、和高の画業と人生を振り返る時、大きな力を持って浮かび上がるのは、「人格」という言葉である。和高との出会いを通して、人間の一番の価値は人格にこそ求められるという思いを私は強くした。いかに地位や名誉に恵まれ、あるいは財産や知識、才能が豊かであっても、人格が伴わなければその輝きはとたんに失われる。「人格」という言葉の響きはやかたいたいが、本当の「人格」とは、生活者としての確かな誇りを芯としつつも、生かされているものの謙虚さを備え、生きとし生けるものへのあたたかな共感に満ちた柔軟で自然な心持ち、そのようなものではないだろうか。和高において強くこの言葉が思われる背景には、やはり田園という環境の浄化作用も働いているように思う。

和高家の庭には大きな木蓮の木が三本立っていた。和高自身が求めてきて植えたものと聞いたが、仮に和高四十歳の時のこととしても既に半世紀。見事な枝振りを見上げるたびに和高の歩んだ年月が思われた。

木蓮は四月の初め、二本が白、一本が赤の花をつけた。出合いの翌年から三度、私はこの木蓮の花見の宴によばれていった。満開の花の下、

和高を囲む人々の輪の中で心尽しの膳に箸をつけ、談笑した日の輝きは今もあせることなく私の心の中にある。

これからの日々もおそらくずっと私は、春がめぐるたびに和高邸の木蓮に思いはせ、木蓮の花を見ると、田園に生きた画家和高節二のことを思い出すであろう。

・和高節二の作品



田植え時 1929年



薪を入れる娘 1935年



猫と話をする老人



ミレー自画像の模写

・ミレーの作品



春 1868—73年



薪集めの女たち(冬) 1852—53年

関係略年譜

- 1814年 10月14日、ジャン・フランソワ・ミレー、フランス・ノルマンディ地方の農村グリュシーに生まれる
- 33年 シェルブールで絵を学ぶ
- 37年 パリへ赴き、ドラロッシュのアトリエへ入る（39年に去る）
- 40年 肖像画でサロン初入選
- 41年 ポーリーヌ・ヴィルジニー・オノと最初の結婚
- 44年 生活苦の中、妻死去。この頃より46年頃まで「華やかな手法」
- 45年 カトリーヌ・ルメールと知り合う
- 48年 サロンに〈箕をふるう人〉出品、好評
- 49年 パルビゾンに定住
- 50年 サロンに〈種をまく人〉出品
- 53年 アメリカ人作品購入。この頃から生活安定し始める
- 57年 サロンに〈落穂拾い〉出品
- 59年 〈晩鐘〉完成
- [68年 日本、明治維新]
- 70年 サロンの審査員を務める
- [74年 「画家、彫刻家、版画家の無名作家協会展」（第1回印象派展）開催]
- 75年 ミレー、1月3日にまだだった結婚式を挙げる。20日死去
- 76年（明治9） フォンタネーヅ来日
- 88年（21） 黒田清輝パルビゾン訪問（24年後に「20餘年前のパルビゾン村」執筆）
- 90年（23） 林忠正ミレー作品公開
- 98年（31） 9月16日和高節二、広島県高田郡長田村（現在の高田郡向原町長田）に生まれる
- 1900年前後 世界的にミレー人気高まる。日本でも関係出版物など相次ぐ
- 15年（大正4） ロマン・ロラン著『ベートーヴェンとミレー』（加藤一夫訳・洛陽堂）刊行
- 19年（8） 節二上京。日本美術学院、川端画学校に入る。帰郷し市原ナイと結婚
- 20年（9） 月に一、二度の「東京通い」始める（二次大戦末期まで）。第1回中央美術展入選
- 21年（10） 〈母子〉制作
- 22年（11） 向原町に「ドガ堂」開設
- 25年（14） 吉川靈華に師事
- 28年（昭和3） 平福百穂に師事
- 29年（4） 〈早乙女〉で帝展（第10回）初入選。中央美術展に〈田植え時〉出品
- 38年（13） 第1回現代美術展に〈秋日和〉が入賞
- 40年（15） 紀元2600年奉祝日本画展で〈牡牛（こっとい）〉が文部大臣賞（最高賞）受賞
- 40年代、50年代はしばしば療養生活を送る
- 61年（36） 丑年を祝し天満屋広島店で個展開催
- 78年（53） 〈種をまく人〉などミレーの諸作で知られる山梨県立美術館開館
- 86年（61） 広島県立美術館の昭和61年度第1期常設展にて代表作14点展覧。向原町名誉町民に推される。向原町の駅ビル完成記念として向原町中央公民館で町内所蔵作品展も開催される
- 89年（平成元年） 広島県立美術館にて「和高節二ー野に生きるー」展開催される。あわせて画集も刊行される
- 90年（2） 10月10日この世を去る
- 91年（3） 1月10日から22日まで、広島市内のスズカワ画廊にて遺作展が開催される

注

注1 財団法人県民センター発行月刊『けんみん文化』。和高の「訪問記」は一九八七年六月号に掲載。

注2 和高の長女の貞子さん。〈母子〉をはじめ、多くの作品に描かれている。

注3 以下、和高の言葉は『けんみん文化』一九八七年六月号「訪問記」より。

注4 井出洋一郎編「ミレー略年譜」(『ミレー展——「四季」アース色のやさしさ』 井出洋一郎、アレクサンドラ・R・マーフィー監修執筆/日本テレビ放送網株式会社編集発行/一九九一)を主な資料とした。

注5 岩波文庫の『ミレー』(蜷原徳夫訳/一九九一第二十六刷)に、ロマン・ロランの評伝とともにある、ミレー自身による「幼時の思い出」参照。

注6 5と同様の「パリの思い出」参照。

注7 日本におけるミレーの受容史については、以下の文献を主な資料とした。

ロバート・L・ハーバート「ミレー展に寄せて」(『ミレー展——「四季」アース色のやさしさ』)

原田平作「日本とミレー」(『ミレー展ポストン美術館蔵 開催記念シンポジウム報告書』 山梨県立美術館編集発行/一九八六)

小野迪孝「日本におけるミレー史」(『開館一周年記念特別展 ミレーとバルビゾン派』 山梨県立美術館編集発行/一九七九)

注8 和高の足跡についての主な資料は先に挙げた『けんみん文化』一九八七年六月号と、広島県立美術館学芸課編「和高節二年譜」(『和高節二画集・野に生きる』 和高節二画集刊行委員会編集発行/一九八九)。また、和高伸二氏執筆の原稿(近々発刊予定の和高の評伝)も拝見し、参考にさせていただいた。

注9 『けんみん文化』一九九一年十一月号 (はった・のりこ 広島県民文化センター)